

「『四旬節～復活祭～聖霊降臨』、この期間を迎えることに神に感謝！」

清川泰司神父

2024年度も大司教からの移動の辞令が無く、高槻・茨木小教区に赴任して9年目を迎えることになりました。そんな中、「四旬節」、「聖なる三日間」、「復活祭」と、私たちの信仰を深める恵みの期間を迎えています。カトリック信者にとって、この期間は約2千年前に「イエス・キリスト」の言葉と行い、そして死と復活によって完全に示された人類救済を切に望む「神の御心」を深く想起する時でもあります。また、その後の「復活節」、「聖霊降臨」を通して、人類救済を望む「神の御心」を生きる教会の存在意義、また一人ひとりの信者が「洗礼」を受けた真意(神の御心)を深く理解する時でもあるのです。

このカトリック教会の「典礼暦」はユダヤ教の伝統をもとに、キリスト教化したものです。ユダヤ教には「過越祭」という行事があり、これがカトリック教会の「復活祭」にあたります。「過越祭」とは、簡単に説明するとユダヤ人の先祖(イスラエルの民)がエジプトの奴隷であった時、神によって奴隷から解放されたことを思い起こし、神に感謝する祭りです。また、「過越祭」の50日後に行われる「五旬祭」という行事があり、これがカトリック教会の「聖霊降臨」にあたります。この「五旬祭」は、イスラエルの民が奴隷から解放され神から与えられた「約束の地」までの40年間の苦難の旅の途中、神から与えられた「十戒」を思い起こす祭りです。この「十戒」は、神がイスラエルの民を真の意味で「神の民」としての尊厳を見出すための「律法」でもあるのです(申命記8章2-16参照)。

このイスラエルの民を神が導き、彼らに「律法」を授けた真意について、「聖書」には神がイスラエルの民を「神の御心」に生きる人類模範の民にしようとしたことが記述されています(出エジプト記19:3-6/22:20-26参照)。しかし、この全人類の救いを求める「神の御心」は、多くのユダヤ人にとって自民族の救い、また、「律法」も形骸化した「掟」と化し、狭いものに認識されるのです。そのような中、人類救済を求める「神の御心」をより具体的に世に示す為に来たのが「イエス・キリスト」であり、そのキリストを信じ生きるのが洗礼を受けたカトリック信者となるのです。

カトリック教会は、イエス・キリストが示した「神の御心」を反映させた典礼暦を作り、ユダヤ教の「過越祭」を「復活祭」とし、「五旬祭」を「聖霊降臨」としました。その典礼の中心は「イエス・キリスト」の言葉と行い、そして、十字架の死と復活により示された「神の御心」との交わりです。このことにより「個人の救い」、「自民族の救い」を超える「全人類の救い」という希望を人間が持つ可能性が生まれたのです。

イエスは、人類に全人類の救いを望む「神の御心」を示す言葉(新しい律法)をたくさん残しました。その一部を紹介すると「互いに愛し合いなさい」、「赦しなさい」、「小さい者を大切にせよ」、「見返りを求めるな」、「偉くなりたいたい者は全ての人に仕える者になりなさい」、「敵を愛し、自分を迫害する者の為に祈れ」、そして、イエスの言葉は、全人類の救済を求める「神の御心」に繋がる生き方へと人間を誘うのです。

さらに、神は、イエスの十字架での死によって、人類が御自分の御心に繋がらない致命的要因である利己的野心、情念、保身、妬み、恨み、暴力性、集団心理などの罪深さを明らかにします。その上で、神は、イエスを復活させることにより、その罪から人間を解放する道を作るのです。つまり、神は、狭き救いしか求めることの出来ない人間を見捨てず御自分の壮大なる愛の御心に招くのです。そしてイエスの昇天後、人類救済を諦めることの出来ない「神の御心」である「聖霊」を人類に送ることで、イエスが語っていた「神の御心」の真意を悟る力を人間に与えるのです。その「聖霊」は、世の終わりまで人類に関わるのです。教会は、その「聖霊」の降臨により誕生したのです。そして、教会は聖霊により導かれ、イエス・キリストが人類救済を求める神を世に伝え、証ししたように「教会」も、「神の御心」を伝え、証しする使命があります。それは「洗礼」を受けた信徒一人ひとりの使命でもあるのです。この意味で、洗礼を受けた者は神との

契約から「神の御心」を深く享受する必要があるのです。そのためにカトリック教会は典礼暦において、この「四旬節」～「復活祭」～「聖霊降臨」を重要な期間としているのです。

今年も、「復活徹夜祭」において数名の方が洗礼を受けます。その洗礼は、この文面で示した神との契約を結ぶ式です。また、その式において、すでに洗礼を受けた方々も、神との契約を更新し新しくされるのです。

カトリック教会は、「典礼暦」の1年間を通じて、信者が神との繋がりを豊かにする工夫がされています。その豊かさを享受する為にも、これからも「主日のミサ」の参加をお勧めします。一週間は168時間です。その168時間の中の約1時間、自己の私情から解放され、全人類の救済を不思議な形で実現させようとする「神の御心」を共有する時を作ってもいいのではないのでしょうか。しかし、このように言っても、身体的、また仕事上、ミサに参加できない人もいるでしょう。その人々とも時空を超えて祈りの繋がりを持ちたいと思います。そのような中、「神の御心」を理解し、想起し、それを人生に生かす人々が増えることを願います。その願いは神の願いと繋がるのです。

私自身、今回書いた「神の御心」を伝えることは、どこに行っても変わりません。2024年度も高槻・茨木小教区での司牧が続きます。これからもよろしく願いいたします。